

震災経験を読む

— インドネシアの事例 —

二〇〇四年に発生したスマトラ沖地震から昨年の二月二十六日で一〇年が経った。インドネシアのスマトラ島北西沖、インド洋で発生したこの地震はインド洋に接する多くの国々に未曾有の被害をもたらし、なかでもインドネシアでの死者・行方不明者の数は一六万人以上とされ最も多かった。以下ではスマトラ沖地震津波を中心としたインドネシアにおける震災の経験とその復興に関連する日本語文献をいくつか紹介したい。

インドネシアのなかで最も大きな被害を受けたスマトラ島北端のアチエ州（以下、アチエ）は震災当時、独立を巡る紛争の真っ只中にあった。そのため、震災・復興活動と紛争経験は不可避に交じり合いながらアチエ社会ひいてはインドネシア全体に変化をもたらすこととなった。西芳美「スマトラ沖大地震・津波／インドネシア（二〇〇四年）変革の契機としての自然災害（特集復興は進んでいるか？ アジアの自然災害）」（本誌二〇〇九年六月号）では、紛争という背景をとめないながら震災および復興活動を通じてインドネシアが経験した変革について社

土佐 美菜実

会意識、行政、政治的制度の面から述べられている。さらに同著者『災害復興で内戦を乗り越える…スマトラ島沖地震・津波とアチエ紛争（災害対応の地域研究2）』（二〇一四年 京都大学学術出版会）では、アチエ現代史を専門とする著者が、震災直後、復興再建期、そして新たな秩序構築という九年間の流れを様々な局面（支援、モスク、防災教育、女性、再埋葬、復興庁など）から丁寧に解説している。また、同シリーズ山本博之著『復興の文化空間学…ビッグデータと人道支援の時代（災害対応の地域研究1）』（二〇一四年 京都大学学術出版会）では、スマトラ沖地震を含む二〇〇〇年以降に発生した複数の地震を事例として、情報伝達、報道、語りなど「災害と情報」をキーワードに各震災での経験や取り組みについて論じている。その他、辰巳佳寿子ほか著『津波被災地の復興における女性の役割—インドネシアのアチエ州と東北地方の比較を通して—』（二〇一四年 アジア女性交流・研究フォーラム）はアチエと東日本大震災後の東北地方における震災・復興を通じた女性の役割を比較した一冊であり、女性を中

心にコミュニティ内の社会関係の再構築プロセスを描き出し、女性の役割の重要性と震災での課題を論じている。高橋誠ほか編著『スマトラ地震による津波災害と復興』（二〇一四年 古今書院）は災害研究における文理連携型の包括的アプローチの必要性を説きながら、アチエでの被害・緊急対応・復興を追った一冊である。個人・家族レベルでの被害状況とその後の変化や、家族、コミュニティ、あるいはNGOや政府といった様々な組織や構成単位の役割と相互関連、そして紛争経験の影響などあらゆる次元から被害と復興過程を捉えたうえで、今後起こりうる大災害に備えるための課題についても提示している。その他林勲男編著『自然災害と復興支援（みんぱく実践人類学シリーズ9）』（二〇一〇年 明石書店）は、スマトラ沖地震で特に被害の大きかったインドネシア、スリランカ、インド、タイでの現地調査に基づいた種々の論文を収録している。なかでも、インドネシアについては多くの論文が収録されている。例えば、林能成「目撃証言から津波の挙動を探る」は体験談という「人の記憶」を、計測器から得られる津波データを補完しうる情報源として位置づけ、被災者の語りから津波発生とその後の時間的推移の解明を試みている。また、木村玲欧「定性的・定量的評価から明らかになった被災

者行動と生活再建のようす」では通常の価値観から逸脱した災害直後の時期を通過したとされる、震災後一カ月後に焦点を当てて被災者へインタビューを行い、彼らが居住地などの復興再建への道すじにおいて直面する問題や、新たに生じる課題を明らかにしている。この他にも震災後の住宅再建、供給プロセスについて解説した牧紀男・山本直彦「バンドアチエの住宅再建—現地再建と再定住地」がある。

最後に、図書館などにおける資料の被災に関する文献についてもここで取り上げておきたい。西芳実「情報拠点の被災と復興—二〇〇四年インド洋地震・津波後のインドネシア・アチエ州の事例から—」（本誌二〇一三年三月号）ではアチエでの図書館や情報拠点の被災状況とその後の対策、そして今後の課題について解説されている。その他、国立国会図書館公開セミナー記録集『スマトラ沖地震・津波による文書遺産の被災と復興支援』（二〇〇五年 日本図書館協会）では被災してから間もない現地からの被害状況および復興に向けた方針、取り組みに関する報告を読むことができる。

（とせ）みなみ／アジア経済研究所 図書館